

共同体の分解作用と高利貸資本

新 田 滋

はじめに

本稿では、マルクスの錯綜したまま残された『ドイツ・イデオロギー』、『資本制に先行する諸形態』、『資本論』第1巻・第3巻の諸章、「ヴェラ・ザサーリッチへの手紙」草稿群などの諸論稿の叙述を整理し、共同体の分解作用に関する考え方を復元し、評価を試みる。

まず、マルクスが最も詳細に研究したのは、生産力の発展、人口の増大などによる、原始的共同体からアジアの共同体ないし「農業共同体」への移行であった。これらはいずれも分解されにくい頑強さをもつものとされた。次いで、分解されやすい性質をもつローマ的、ゲルマン的な共同体に移行する過程が研究された。その上で、ローマ的、ゲルマン的な共同体についても、戦争による軍務負担によって、しだいに高利貸資本に土地所有が集積されていくことで分解していくことが一般的な転機とされた。

したがって、マルクスはどこにおいても、商品交換の共同体内部への反作用による共同体の分解作用についての説明に成功してはいなかった。このことは、商人資本・商業資本とは共同体を破壊する詐欺瞞着であるとみなすマルクスの誤った先入観が、マルクスの研究自身によって否定されていたことを示すものである。それはまた、問題は高利貸資本にこそあるということを意味している。

第1節 商人資本・商業資本の共同体分解作用について

1) 商品交換の共同体内部への反作用について

マルクスは『資本論』第3巻第20章「商人資本にかんする歴史的スケッチ」¹⁾において、商人資本・商業資本が共同体を分解するという言い方を2箇所で行っている。

「[S.342] 商業は、享受と生活維持とを生産物の直接的使用よりはその販売にいっそう依存させることによって、生産をますます交換価値に従属させるであろう。それによって、商業は、古い諸関係を分解する。商業は、[S.343] 貨幣流通を増加させる。商業は、もはや単に生産の余剰をつかまえるだけでなく、しだいに生産そのものを侵食し、すべての生産部門を自己に依存させる。とはいえ、こうした分解作用は、生産する共同体の性質におおいに依存する。しかし、商業がどの程度まで古い生産様式の分解を引き起こすかは、まずもって、この生産様式の堅固さと内部編制とに依存する。」(『資本論』第3巻第20章)

「[S.344] 商業と商業資本の発展は、いたるところで、交換価値をめざす生産を発展させ、その範囲を拡大し、それを多様化し、それに世界的性格を与え、貨幣を世界貨幣に発展させる。それゆえ商業は、既存の生産諸組織——その形態のあらゆる相違にもかかわらず主として使用価値をめざしているそれら——にたいして、いたるところで多かれ少なかれ分解的に作用する。」(同前)

1) 『資本論』第3巻第20章の本筋の課題は、資本主義以前ないし先ブルジョア的な商人資本・商業資本が、近代的な商人資本・商業資本へと変成されていく過程を概観することであるが、本稿では、そこから商人資本・商業資本による共同体分解作用について論及している箇所を抽出して再構成する。

みられるように、上記二つの引用文は、商業の共同体分解作用に関してはまったく同趣旨の重複した内容となっているが、この20章には、これ以上どのようにして商業が、「しだいに生産そのものを侵食し、すべての生産部門を自己に依存させる」のか、「既存の生産諸組織——その形態のあらゆる相違にもかかわらず主として使用価値をめざしているそれら——にたいして、いたるところで多かれ少なかれ分解的に作用する」のかということについての、より立ち入った説明はみられない。

もっとも、この点に関しては、よく知られているとおり、『資本論』第1巻第2章において次のように述べられている。

「[S.102] 商品交換は、共同体の終わるところで、諸共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の諸成員と接触する点で、始まる。しかし、諸物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それらのものは反作用的に、内部的共同生活においても商品になる。」（『資本論』第1巻第2章）

このように、マルクスは、諸物が共同体間で商品となれば、それらは反作用的に共同体内部においても商品となると説明している。しかし、この説明だけでは、具体的にどのような機序によって、そのような反作用が生じるのかがまったく不明確である。

また『資本論』第1巻第24章「いわゆる原始的蓄積」は、中世末期以降のイギリスを中心とした西欧における、「封建社会の経済構造の解体」[S.743]を扱っているが、そこにおいても、商品交換による共同体分解作用が論証されているとはいえないであろう。（以下、本節の引用はとくに断らない限り『資本論』第1巻第24章からのものである。）

第1節「原始的蓄積の秘密」においては、「賃労働者と資本家とを生み出した発展の出発点は、労働者の隷属状態にあった。その進展の本領は、この隷属の形態変換に、すなわち封建的搾取の資本主義的搾取への転化にあった」としているが、しかし、「農奴的隷属と同職組合的強制からの生産者

の解放」は、「とっくに実現されて」いたとされる [S.743]。すなわち、第2節「農民からの土地の収奪」では、「[S.744] イギリスでは農奴制は14世紀の終わりごろには事実上消滅していた。そして15世紀にはなおいっそう、人口の大多数が自由な自営農民……から成り立っていた」のだという。

それではここから自営農民からの自由保有地の収奪が取り上げられるのかと思うとそうではなく、その後、第2節で取り上げられているのは、もっぱら土地所有者による共同地の横奪をつうじた自営農民の没落の過程である。

この「[S.752] 共同地……は、封建制の外被の下で存続した古ゲルマン的制度であった」とされ、「農奴でさえ、……自分の家に付属する零細地の所有者であっただけでなく、共同地の共同所有者でもあった」のであり、また、「[S.750] 農村賃労働者でさえも、まだ共同地の共同 [S.751] 所有者であった」が、「[S.750] 18世紀の最後の二、三十年の間には農耕民の共同地の最後の痕跡も消滅してしまった」とされる。

このような古ゲルマン的共同体が、「ヴェーラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群の段階における大移動以前の「農業共同体」（耕地は割替制、共同地は共有）に相当するのか、大移動後の「新しい共同体」（耕地は私有、共同地は共有）に相当するのかも読み取りがたいが、ともかくも、自由な自営農民は古ゲルマン的な共同地を共有する限りにおいて、共同体のもとにある存在とみなされていたといえる。

たしかに、このような共同地の横奪に「[S.746] 直接の刺激を与えたのは、イギリスではとくにフランドルの羊毛マニュファクチュアの繁栄とそれに照応した羊毛価格の騰貴であった」とされている。それに続けてマルクスは、「[S.746] 古い封建貴族は大きな封建戦争にすっかりのみ込まれてしまい、新しい貴族は貨幣をあらゆる権力中の権力とする新しい時代の子であった。したがって、耕地の牧羊場への転化は新しい貴族の合い言葉となった」としている。しかしながら、じつはマルクスは、「[S.751] われわれはここでは農業革命の純経済的な動機は度外視する。われわれはこの農

業革命の暴力的槓杆を問題にしよう」と対象を限定している一方で、後に第5節「工業への農業革命の反作用。産業資本のための国内市場の形成」においては、農業革命が「[S.773] 耕作者の数が減少したにもかかわらず、土地は以前と同量かまたはより多量の生産物を生み出した」ということに言及している。

すなわち、実際には、この農業革命による生産性の上昇こそが、農村人口の減少と都市への人口移動を促した最大のプッシュ要因だったのであり、他方、都市工業の発展がプル要因だったわけである。その過程における暴力的槓杆（バブル期の日本の「地上げ」などにもみられたような）だけに焦点を当てたのが第2節の叙述であった。その暴力的槓杆に商人資本・商業資本や高利貸資本が関わっているようにみえても、それは表面的なことではなかったといえるであろう。

また、第6節「産業資本家の創世記」は、叙述がとりわけ錯綜していて論旨が読み取りにくい、あらすじを辿ると以下になるだろう。

「[S.777] 同職組合の多くの小親方や、さらに多くの独立した小手工業者、あるいはまた賃労働者さえもが……資本家に転化した」ものの、「[S.778] しかし、この方法の蝸牛の歩みは15世紀末の諸々の大発見によって作り出された新たな世界市場の商業的要求に照応するものでは決してなかった」。それ以外に、「[S.778] 中世は二つの相異なる資本形式、……商人資本と高利貸資本とを伝えていた」のであり、「[S.778] 高利と商業とによって形成された貨幣資本は、封建制度と同職組合制度によって産業資本への転化をさまざまげられ」ていたが、それらの制限がなくなるとともに、輸出港や農村部に新たなマニュファクチュアがおこされるようになっていた。

オランダの商業的覇権にとって植民制度の暴力的略奪が主要な役割を演じ [S.782]、イギリスで発展した国債と租税制度は、富の資本化、大衆の貧困化 [S.784] を促進した。

しかし、「[S.785] 植民制度、国債、重税、保護貿易、商業戦争など」

は、原蓄の強力な槓杆であったが、それはいまだ、「[S.785] 大工業の幼年期中に巨大に繁茂する」ものの若芽にすぎなかった。すなわち、「[S.787] 綿工業はイギリスに児童奴隷制を導入したが、それは同時に、合衆国の従来の多かれ少なかれ家父長的であった奴隷経営を商業的搾取制度に転化させるための刺激をも与えた」のであり、ヨーロッパでの賃労働者の隠された奴隷制は、新世界でのあからさまな奴隷制を必要とした一。

したがって、「産業資本家の創世記」は、オランダの植民制度、イギリスの国債と租税制度、綿工業における児童奴隷制と黒人奴隷制に色取られた、「[S.788] 頭から爪先まであらゆる毛穴から、血と汚物をしたたらせ」たものであったというのが、あらずじであろう。

ここにおいても、商人資本と高利貸資本が、商品交換をつうじて直接的に共同体を分解する作用をしたとは書かれていない。ここで書かれていることは、ただ、「[S.342] 商業資本の発展が、……暴力的略奪、海賊、奴隷狩り、植民地における圧制と直接に結びついている」（『資本論』第3巻第20章）ということだけである。

さらに、マルクスの遺稿である『資本制に先行する諸形態』、「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群などには、マルクスのこの問題に関する基本発想が伺われる記述が散在しているので、次にそれらについても検討してみよう。ただし、ことに『資本制に先行する諸形態』は、遺稿であるだけに叙述はたえずさまざまな主題が錯綜し、また同じ事柄が執拗に重複してあらわれるものとなっている。そこで、ここでは、商業による共同体の分解作用を主題として、重複、錯綜したマルクスの叙述を整理してみることにする。

2) 原始的形態、アジア的形態における共同体的所有の頑強性

『資本制に先行する諸形態』においては、共同体について、「[45頁] 人間は……本源的には一つの類的存在 [Gattungswesen]、部族団体 [Stammwesen]、群棲動物 [Herdentier] として現れる」。それは、いまだ

都市国家レベルの法・政治機能を備えた、アリストテレスのいう意味での「政治的な意味での一個の社会的動物 [ζῷον πολιτικόν] としてではなく、[[9頁] 家族、および部族のかたちに拡大した家族、ないしは家族間の相互の結婚によるもの、または諸部族間の結合」だとする²⁾。

ここでマルクスのいう家族、部族という概念は、やがてマウラーやモルガンの知見によって修正されていくこととなったが、さしあたりは、原始的な血縁集団とその結合集団、さらにその結合集団という程度の意味で解しておけば十分である。

マルクスは、1868年にマウラーを読んで、家族は、原始共産制的な氏族共同体のあとの「農業共同体」において、共有地とともに割替制の菜園を占有するものとして、はじめて分立したという認識をもつようになった。また、マルクスは、1881年5月から1882年2月にかけてモルガン『古代社会』の詳しいノートをとっていたが（『マルクス＝エンゲルス全集』補巻4、大月書店、1977年、に「モーガン『古代社会』摘要」として収録されている）、モルガン『古代社会』においては、生活手段の生産の進歩をもとにして、人類史がまず野蛮 *savagery*、未開 *barbarism*、文明 *civilization* の三つの主要な時期に区分され、野蛮、未開のそれぞれが下位・中位・上位に区分されている。

野蛮の下位は動物界の一部に属していた時代、中位は旧石器時代、下位は新石器時代におおむね対応する。また、未開の下位は土器製作が導入され農耕・牧畜がはじまった時代とされ、中位は東半球（ユーラシア大陸）で遊牧がはじまった時代、上位は同じく東半球で鉄器、文字の使用がはじまった時代であり、ホメロスの叙事詩とギリシア神話を遺産とするような

2) なお、マルクスは、Gemeinwesen, Gemeinschaft, Gemeinde, Gemeindegemeinschaft, community, commune, Kommune などの単語を使っているが、これらを厳密に使い分けられているとして、大塚久雄 [1955年]『共同体の基礎理論』をはじめとして多種多様な解釈と訳語があてられている（渡辺憲正 [2005年]、参照）。しかし、筆者にはどうしても、マルクスがこれらの単語を厳密に使い分けられているようには読み取れないので、本稿ではとくに区別は意識しないこととする。

ギリシアの「英雄時代」などに対応するものとされる (Morgan [1877], 邦訳頁数24-40頁。エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』, 岩波文庫版では31-38頁, 全集21巻ではS.30-35に概要が紹介されている)。

モルガンによると, 未開下位にあったイロクォイ連合体や未開上位にあったアステカ連合体は, 氏族・胞族・部族の連合体であり, 他の諸部族を征服して貢納関係においていたが, その内部では, 男女全員が投票する選挙によって酋長 (平時の族長) と首長 (軍事指揮者) が選ばれていた。これは, 氏族社会の段階にあったギリシア人のバシレウス, ローマ人のプリンキペス, ゲルマン人のレークス, ドックス, 等々においてもほぼ同様であったとされる。

以上のような分類に対応させるならば, 原始共産制的な氏族共同体は, モルガンでいえば野蛮の状態に, 「農業共同体」は未開の状態に対応しているといえよう。

ところで, マルクスは『資本制に先行する諸形態』において, そもそも, 「[9頁] 人間は生まれながらにして定着するものではない」ので, 「遊牧生活, 一般に移動というものは, 部族 Stamm がある一定の場所に定住しないで, 見つけしだいの牧草を食わせるといった生存様式の最初の形態であると想定できる」(『資本制に先行する諸形態』) としている。つまり, マルクスは, 原始的な血縁集団は, 遊動バンドとして存在していたと考えていたわけである。

そのため, 「部族共同社会 Stammgemeinschaft, 自然的共同団体 natürliche Gemeinwesen は, 土地の共同体的領有 (一時的な) と利用の結果としてではなく, その前提として現れる」ものだとされていることに留意する必要がある。

その上で, マルクスは, もし定住民族のもとに一足飛びするならばとして, 共同団体 Gemeinschaft の自然的生産条件である土地にたいする唯一の制限は, 同じように自然的生産条件である土地を要求する他の共同団体であるという [37頁]。「だから戦争とは, 財産を固守するため, また財産

の新規獲得のため、これに自然生的な共同体のどれもがおこなうもっとも本源的な作業の一つである」ともいわれている。したがって、「自己労働の自己所有」というのは、マルクスにおいてはあくまでも「自由な小土地所有者」という特殊歴史的形態に該当するものでしかないことにも留意する必要がある。

ところで、このような、「[28頁] 共同体が旧来の様式をそのままで存続するためには、その成員を、まえもってあたえられた客観的諸条件のもとで再生産することが必要である」と、マルクスはいう。すなわち、「[41頁] その共同体を形成する個人を所有者として再生産すること、……したがってまた共同体それ自体をも形成する、同一の客観的存在様式において個人を再生産することである」とされる（以上、『資本制に先行する諸形態』）。

以上のような共同体の基本的な規定を踏まえて、マルクスは、原始共同体、アジア的共同体（「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群の段階では「農業共同体」）においては、いまだ商品交換の共同体内部への反作用による分解作用は起こりにくいものだという。

「[29頁] アジア的形態は、必然的にもっとも頑強に、またもっとも長く維持される。そうなるわけは、個々人が共同体にたいして自立していないこと、生産の自給自足的圏域、農業と手工業との一体性 [Einheit] 等というその前提にある。」（『資本制に先行する諸形態』）

このような考え方は、『資本制に先行する諸形態』において繰り返し語られているだけでなく、1853年以来の一連のインド論考、『資本論』の随所とりわけ第3巻第20章において比較的まとまった叙述が与えられ、さらには、最晩年の「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群においても語られている³⁾。それだけ、マルクスにとっては、重要な基本的認識であったと

3) 「[41頁] 東洋的形態ではこのような喪失はまったくの外部的な影響による以外にはほとんど生じえない。共同体の個々の成員は、彼の結びつき（共同体にたいする客観的な、経 [43

いうことができるものである。

3) 共有にもとづく社会から私有にもとづく社会への過渡段階

東洋的形態においては、共同体の個々の成員は、共同体にたいする客観的、経済的な結びつきが失われることもありうるような自由な関係には、けっしてはいりこむことがないとするならば、「[29頁] 個々人が共同体にたいするその関係を変化させるならば、彼はそれとともに共同体を変化させ、また共同体にたいし、またその経済的前提にたいし破壊的に作用する」こととなるであろう（同前）。

そのような作用は、「[28頁] 生産そのものと人 [29頁] 口の増進（この増進も生産のうちにはいる）は、必然的につぎつぎにこれらの諸条件を止揚する」というように、生産力の上昇、人口の増大によって説明される。

頁] 済的なそれ) がそのために失われることもあるかもしれぬような共同体との自由な関係には、けっしてはいりこむことがないからである。」(『資本制に先行する諸形態』)

「[S.345] 前資本主義的、国民的生産様式の内的な堅固さと編制とが商業の分解作用に対抗して設ける障害は、インドおよび中国とのイギリス人の交易に適切に示されている。ここ[インドおよび中国]では、生産様式の広範な基盤が小農業と家内工業との統一によって形成されており、その場合インドではさらに、土地の共同所有にもとづく村落諸共同体の形態が加わるが、もっとも、この形態は中国でも本源的な形態であった。インドでは、イギリス人は、これらの小さな経済的共同体を粉碎するために、支配者および地代生活者として、彼らの直接的な政治的権力と経済的権力を同時に行使した。彼らの商業がここで生産様式に革命的に影響をおよぼす限り、それはただ、彼らが、彼らの諸商品の低価格によって、この工=農生産の統一の太古的=不可分の部分をなしている紡績業と織物業とを壊滅させ、こうして共同体をずたずたに引き裂く限りでのことにすぎない。ここインドにおいてすら、彼らは、非常に緩慢にしかこの分解の仕事に成功していない。直接的な政治的権力の助けを借りることができない中国では、なおさらである。農業と加工業との直接的結合から生じる大きな経済と時間の節約とが、ここでは、大工業の諸生産物——その価格には、大工業をいたるところでむしばむ流通過程の"空費"がはいり込む——にきわめて頑強な抵抗を示す。」(『資本論』第3巻第20章)

「[124頁] 農業共同体の構造に固有な二重性が、この農業共同体に力づよい生命をあたえうることは、だれもがわかっている。自然的血縁関係という強靱ではあるが狭隘な紐帯から解放された土地の共有と、それから生じる社会関係とが、農業共同体に強固な基礎を保証し、それと同時に、個々の家族の排他的領域たる家屋と屋敷、分割地耕作およびその成果の私的占有が、より原始的な共同社会の組織とは両立しない個性をのぼしてやる。」(「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群・第三草稿)

生産力の上昇については、

「[41頁]もし同一面積での生産性がたとえば生産力の発展等(これは古来の耕作にあってはまさしくもっとも緩慢であるのだが)によって増大しうることが考えられるとしても、それは労働の新しい様式、新しい結合、一日の大部分を農業についやすこと等々をふくむことであろうし、またそれとともに共同団体の古くからの経済的諸条件をも止揚することであろう。……生産者も、自分のなかから新しい資質を引きだし、生産によって自分自身を発展させ、改造し、新しい力や新しい観念を形成し、新しい交通様式、新しい欲望、また新しい言語を形成して、みずからを変化させる」

であろうとされている。

また、人口の増大については、「[41頁]たとえば各個人がなにがしエーカーの土地を占有しなければならぬところでは、はやくも人口の増進がさまたげとなる。このさまたげを予防しようとするれば、植民となり、またこの植民は征服戦争を必要とする。それとともに、奴隷等々が《生ずる》。たとえばまた公有地の拡大がおこり、そしてそれ [42頁]とともに、共同団体を代表する貴族が《生ずる》、等」とされている(以上、『資本制に先行する諸形態』)。

この点は、「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群においては、次のように規定されている。

「[124頁]土地の私有が、菜園つきの家というふうな形で、共同体[ここでは農業共同体を指している]のなかにしのびこんでいる。……だが、肝要なのは、私的占有の源泉としての分割労働である。これは、動産、たとえば、家畜や貨幣、ときには奴隷または農奴さえもの——蓄積をおこさせる。詭計と偶然にとって絶好の機会となる個人的交換の対象であり、共同体の統制することのできない動産が、ますます農村経済全体のうえにのし

かかってくるであろう。これこそ経済上・社会上の原始的平等の破壊者である。これは共同体内部に利害と欲情の衝突をまきおこす異分子をひき入れる。この衝突はまず耕地の共有を、次には森林、牧地、荒地地等の共有を傷 [125頁] つけるのであるが、これらのものは、いったん私有財産の共同体的付属物にかわると、いつかは私有になるのである。」(「ヴェラ・ザサーリッチへの手紙」第三草稿)⁴⁾

以上のように、生産力の発展、人口の増大にともなう動産所有の萌芽とともに、個々人と共同体との関係が変化していくと、「[41頁] このようにして古い共同団体の維持は、その基礎である諸条件の破壊をふくみ、その反対物に転回する。」(『資本制に先行する諸形態』)とされる。それはまた、最晩年の「ヴェラ・ザサーリッチへの手紙」草稿群においては、次のように規定されることとなった。

「[124頁] 原始的社会構成体の最後の段階としての農業共同体は、同時に二次的構成体への過渡段階であり、したがって、共有にもとづく社会から私有にもとづく社会への過渡段階である。」(「ヴェラ・ザサーリッチへの手紙」第三草稿)

以上のようにして、分解されにくい原始共同体、アジアの共同体＝「農業共同体」のうちから、しだいに、分解されやすいローマ的形態、ゲルマンの形態＝「新しい共同体」へと変質していく部分が現れてきたというのが、マルクスの歴史認識であったことがわかる。

4) このように、動産の占有から所有が発生するという視点は、すでに『ドイツ・イデオロギー』においてみられる。「[3b] 所有の第二の形態は、古代的な共同体所有ないし国家所有である。……共同体所有とならんで、はやくも動産の私的所有が、そしてのちになると不動産の私的所有も発展するが、しかしそれは、共同体所有に従属した変則的な形態としてである。」「[91b=69] 本来の私的所有は、古代の諸民族にあっても近代の諸民族のばあいとおなじように、動産所有とともにじまる。」(引用箇所を表示方法については参考文献を参照されたい。)

4) ローマ的形態, ゲルマン的形態における共同体分解の機序

それでは、分解されやすくなったとされるローマ的形態, ゲルマン的形態の共同体に対して、商品交換が反作用して分解していく機序というものは、どのように説明されているのであろうか。

『資本制に先行する諸形態』によると、商人財産としての貨幣財産は、土地所有者が「彼の穀物、家畜等を外国からもってきた使用価値と交換できるようにさせた」[65頁] ことによって、「古い生産諸関係を推進し解体することを助けた」のだという [64頁]。

しかし、ここに至っても、土地所有者が穀物、家畜等を外部の諸物と交換することが、どのようにして、「古い生産諸関係を推進し解体することを助けた」のかということに関する説明はまったくなく、論理が飛躍しているといわざるをえない。

また別の箇所では、「工業と農業、都市(村落)と農村との結合が基礎になっている古代人のばあいには」、「すでに墮落(解放奴隷、被護民、外来人の生業)として現れている」ような「生産的労働……は、外国人との交易、奴隷、剰余生産物を交換しようとする欲望、等によって必然的に発展する」とされ、このような生産的労働の「発展は、共同団体の存立する基礎……である生産様式を解体する。交換も同様に作用する。債務等々も。」[43頁] としている。

この箇所の本文そのものは非常に錯綜した文章となっており、文意に即して整理したもののだが、ここでも結局いわれていることは、「外国人との交易、奴隷、剰余生産物を交換しようとする欲望」によって、解放奴隷、被護民、外来人などが携わるべき墮落として蔑視されていた生産的労働が発展するようになると、共同団体の存立する基礎である生産様式を解体するに至るということでしかない。これは、先の箇所とまったく同じことが繰り返されているにすぎない。

5) 商品交換の反作用によって分解される機序の不在

以上にみてきたように、『資本論』第1巻第4章第24章、『資本論』第3巻第20章のみならず、マルクスの遺稿である『資本制に先行する諸形態』、「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」草稿群を含めても、生産力の発展、人口の増大、動産所有の萌芽によって、分解されにくい原始共同体、アジア的共同体＝「農業共同体」が分解されやすいローマの形態、ゲルマンの形態へと変質する機序までは論理的な説明がみられたが、それらが商品交換の反作用によって分解される機序そのものについては、まったく説明が欠落しているといわざるをえない。

しかし、上記の引用箇所（『資本制に先行する諸形態』[43頁]）の最後に、「債務等々も。」というたった一言の書き付けがある。それは、貴族・領主層や小生産者層への高利貸資本による貸し付けがかさんでいくことによって、共同体が分解されていく機序を説明することについての、マルクスによる自分自身への備忘録というべき性格をもっていたものだといえるであろう。

周知のように、マルクスは、『資本論』第3巻第36章「資本主義以前〔の状態〕」（草稿では「先ブルジョア的なもの」）において、高利貸資本による共同体分解作用について論及している。

第2節 高利貸資本の共同体分解作用について

1) 高利貸資本の生成機序

『資本論』第3巻第36章「資本主義以前〔の状態〕」（草稿では「先ブルジョア的なもの」）⁵⁾において、マルクスはまず、支払手段としての貨幣の機能

5) この章の本筋の課題は、資本主義以前ないし先ブルジョア的な高利貸資本から、近代的な利

が、利子、したがってまた貨幣資本を発展させると、蓄蔵貨幣の所有者は、利子を通して蓄蔵貨幣を自分のために資本に転化するというように、高利貸資本の発生を規定している [S.611-612]。(以下、本節の引用はとくに断らない限り『資本論』第3巻第36章からのものである。)

その際、「[S.611] 高利貸資本と商人財産とは、土地所有から独立した貨幣財産の形成を媒介する」ものであり、「[S.607] 高利貸資本の発展は、商人資本の発展、ことに貨幣取引資本の発展と結びついている」ものとしている。

次いで、高利貸資本が資本主義的生産様式以前の諸時代に実存する特徴的な諸形態として、「第一に、浪費家の貴族たち、本質的には土地所有者たちへの貨幣貸し付けによる高利」、「第二に、自分自身の労働諸条件を所有している小生産者たちへの貨幣貸し付けによる高利」の二つがあげられる [S.608]。

すなわち、「[S.609] 貧乏な小生産者の血を吸い取る高利は、むしろ、富裕な大土地所有者の血を吸い取る高利と手をたずさえて進む」のであり、「[S.608] 高利による富裕な土地所有者たちの破滅も、小生産者たちの吸血も、両方とも大きな貨幣資本の形成と集中とをもたらす」とされる。

2) アジア的形態と高利貸資本

しかし、このような高利貸資本による破壊的作用が、「[S.608] 古い生産様式の代わりに資本主義的生産様式をもたらすかどうかは、まったく歴史的発展段階と、それによって与えられる諸事情とにかかっている」として⁶⁾、マルクスは、アジア的諸形態の場合と、ローマ的形態、ゲルマン的形態との違いを次のように指摘する。

子生み資本、銀行制度が生成する過程を概観することであるが、本稿では、そこから高利貸資本による共同体分解作用について論及している箇所を抽出して再構成する。

6) 第20章においても同趣旨の次のような有名な叙述がある。「[S.344] 商業がどの程度まで古い生産様式の分解を引き起こすかは、まずもって、この生産様式の堅固さと内部編制とに依存する。また、この分解過程がどのような結果をもたらすか、すなわち古い生産様式の代わ

「[S.610] アジア的諸形態の場合には、高利 [S.611] は、経済的衰微と政治的腐敗とのほかにはなにも生み出さないまま、長期にわたって存続しうる。」[S.609] この形態での高利貸資本は、生産様式を変化させることなしに、実際に直接的生産者たちのすべての剰余労働を取得するのであり、……資本は労働を直接に自己に従属させず [草稿では「自己に従属させず」は「包摂せず」]、それゆえ労働にたいして産業資本として相対することは「ない」。

したがって、アジア的諸形態の場合には、「[S.610] 高利は生産様式を変化させず、寄生虫としてこれに吸いつき、これを悲惨なものにする」だけである。

3) ローマ的形態、ゲルマン的形態における「一般的転換期」

それに対して、分解されやすい共同体へと変質している古典古代的なローマ的形態と中世封建的なゲルマン的形態においては、

「[S.610] 高利は、一方では、古典古代のおよび封建的富にたいし、また古典古代のおよび封建的所有にたいし転覆的かつ破壊的に作用する。他方ではそれは、小農民のおよび小市民的生産、要するに、生産者がまだ自分の生産諸手段の所有者として現われるようなすべての形態を転覆し破滅させる。」

とされる。すなわち、古典古代的なローマ的形態と中世封建的なゲルマン的形態における「一般的転換期」[S.613] のパターンとして、ローマ的形

りにどのような新しい生産様式が現われるかは、商業にはなく、古い生産様式そのものの性格に依存する。古代世界では、商業の活動と商人資本の発展とは、つねに奴隷経済に結果する。また、出発点しだいでは、家父長的な、直接的生活維持手段の生産をめざす奴隷制度が、剰余価値の生産をめざす奴隷制度に転化するだけである。」

態の共同体においては、「[S.612] ローマの貴族たちが平民たちを破滅させた戦争」は、同時に、「貴族の倉庫や地下室を当時の貨幣である略奪した銅でいっぱいにした。貴族たちは平民たちにたいして……この銅を平民たちに貸し付け……法外な高利をしぼり取り、こうして平民たちを自分たちの債務奴隷にした。」

そのようにして、「[S.607] 古代ローマでは、手工業が古典古代の平均的発展よりもはるかに低い水準にあった共和制後期以来、商人資本、貨幣取引資本、および高利貸資本は古典古代的形態の範囲内でその最高点に達していた」のであり、「[S.609] ローマの貴族の高利が、ローマの平民、すなわち小農民を完全に破滅させたとき、この搾取形態は終わりを告げ、小農民経済に代わって純粋な奴隷経済が登場した」のであった。

それに続けて、ゲルマン的共同体所有形態のカロリング朝期における転変についても、ごく簡単ながら、「[S.612] カール大帝の治下では、フランク[草稿では「フランク」は「ドイツ」]の⁷⁾農民たちがやはり戦争によって破滅させられ、その結果、彼らは債務者から農奴となるほかなかった」というように触れられている⁸⁾。

7) 『資本論』第1巻第24章第2節注211は、この箇所とまったく同趣旨であるが、そこにおいてもマルクスはカール大帝治下の「ドイツ」と表記している。

8) マルクスは、カール大帝期のフランクないしドイツに簡単に触れた後、さらに、「[S.612] ローマ帝国[草稿では、「ローマ帝国」は「ルーマニアの諸国」となっている]では、周知のように、飢饉のために自由民が子供[草稿には「自由民が子供や」はない]や自分自身を奴隷として富裕な人たちに売られるようになるこ[S.613]とがしばしば起こった」と述べている。草稿の叙述では、唐突にカール大帝の時代から19世紀中葉の「ルーマニアの諸国」に飛ぶことになるので、エンゲルスはこれを「ローマ帝国」の誤記と考えて訂正し、「自由民が子供や」を挿入することによって、よりローマ帝国にふさわしく体裁を整えようとしたのであろう。しかし、その結果、ローマ時代、カール大帝時代の後に、ふたたびローマ時代に戻る形となってしまっている。これに対して、マルクス自身は、あくまでも執筆当時の「ルーマニアの諸国」においても、ローマ時代、カール大帝時代と同様に、「飢饉のために自分自身を奴隷として富裕な人たちに売られるようになることがしばしば起こった」と指摘したのだとみるべきであろう。実際、『資本論』第1巻第4章注40には、「クーザの変革までは事実上ドナウ諸州においても、奴隷制が”債務奴隷制”という形態のもとに隠蔽されている」という記述がある。クーザの変革はまさに『資本論』草稿執筆当時の1864-65年に行われていた。だが、翌1866年にクーデターでクーザは国外追放となった。

なお、両形態についての総括的な記述として、マルクスの叙述では順番が前後しているが、少し前のほうに次のような説明がある。

〔S.610〕債務を負った奴隷所有者もしくは封建領主は、彼自身がより多くの血を吸い取られるので、より多くの血を吸い取る。または、結局彼は高利貸に席を譲り、高利貸自身が、古代ローマの騎士のように、土地所有者または奴隷所有者となる。〕

このように、マルクスは、ローマ的形態、ゲルマン的形態における「一般的転換期」の説明においても、結局は、戦争による軍務負担から高利貸資本への債務依存の結果として、平民や農民の債務奴隷や農奴への転化が生じるとしている。

つまり、高利貸資本による共同体分解の機序においても、商業そのものの共同体への反作用ということは、結局のところ、説明されずじまいとなっているのである。

4) ローマ的形態、ゲルマン的形態における「個別的な場合の考察」

他方、マルクスは、以上のように「一般的転換期」の説明は戦争による軍務負担から行っているのに対して、高利貸資本が介入することになるような「個別的な場合の考察」〔S.613〕として、

〔〔S.613〕小農民にとっては、一頭の雌牛が死ぬだけでも、旧来の規模で自己の再生産を再開することができなくなる。そこで彼は高利の手中におちいり、いったん手中におちいると、二度とふたたび自由にはなれない〔草稿では「そこで彼は」以下が「ここに高利が介入する」となっている。〕〕

ということを挙げている。また別の箇所では、小生産者が、生活諸手段と原料の価格騰貴、不作によって種子の現物補填が困難になることなどのために生産諸条件が補填できなくなるといように説明されている

[S.611]。

なお、日本の江戸時代であればこちらのケースのほうが、豪農層への土地集中の一般的なパターンであったといえる。しかし、日本列島という閉域の中で200年もの間、戦乱がなかったということのほうがむしろ、世界史的には異例なことだったといえよう。

以上のように、マルクスは、ローマ的形態、ゲルマン的形態を対象として、「一般的転換期の説明」としては戦争による軍務負担、「個別的な場合の考察」としては小生産者による補填費用の借り入れによって、高利貸資本による共同体の所有諸形態の分解作用を説明している。このようにして、

「[S.610]資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、高利が、所有諸形態を破壊し分解することによってのみであって、……アジア的諸形態の場合には、高利 [S.611] は、経済的衰微と政治的腐敗とのほかにはなにも生み出さないまま、長期にわたって存続しうる。」

と結論づけられているわけである。

5) 高利貸資本による所有諸形態の破壊と生産様式の保存

しかしながら、共同体的所有諸形態を破壊したからといって、それがただちに新たな生産様式（生産方法）を生み出すわけではない。

「[S.610] 奴隷制が支配している限り、または、剰余生産物が封建領主とその従士団によって食い尽くされ、そして奴隷所有者または封建領主が高利貸の手におちいつている限り、生産様式もまた同じままである。」

しかし、これは、先にみた、「[S.610] 資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、高利が、所有諸形態を破壊し分解することによってのみ」であるという部分と、一見すると平仄が合ってい

ないようにみえる。

だが、「高利が革命的に作用するのは」「所有諸形態」を破壊、分解する場合であり、他方、「同じまま」「変化させられない」のは「生産様式」すなわち生産方法である。マルクスがいわんとしていることは、高利貸資本が旧来の生産様式（生産方法）のもとで債務奴隷化した直接的生産者を外部から吸着して収奪する状態になるということが、共同体的所有諸形態にたいする破壊、分解による革命的な作用だということであろう。

そこで、資本主義的生産様式そのものが成立するためには、特定の歴史的諸条件が必要であるということになる。すなわち、「[S.610] 資本主義的生産様式のその他の諸条件が現存する時と所とにおいてはじめて、高利は、一方では封建領主と小生産者との破滅により、他方では労働諸条件の資本への集中によって、新しい生産様式の形成手段の一つとなる」わけである⁹⁾。

だが、第36章においては、「資本主義的生産様式のその他の諸条件が現存する時と所」がいかなるものかについては、とくに触れられていない。

第36章の後半部分では、利子生み資本が資本主義的生産様式の諸条件および諸要求に従属するという意味で、高利にたいする反作用としてなしとげられる信用制度の発展 [S.613] について展開されている。すなわち、12世紀および14世紀にヴェネツィアとジェノヴァで設立された信用組合、1609年のアムステルダム銀行、1619年のハンブルク銀行、1694年のイング

9) このような認識は、マルクスにおいては早い時期から一貫してあった。

「[3c] 私的所有の集中は、ローマでは非常早くからはじまり（その証拠はリキニウスの農地法）、内乱の後、とりわけ帝政のもとで非常に急速にすすんだ。他方では、これと関連して、平民の小農がプロレタリアートに転化したことである。しかし、このプロレタリアートは有産市民と奴隷とのあいだで中途半端な地位にあったため、自立的な展開には至らなかった。」（『ドイツ・イデオロギー』。なお、当該箇所はエンゲルスとの執筆の持ち分問題については、新田 [2022年]、注2、参照。）

「[62頁] たんに貨幣財産があるということだけでは、……資本への上記の解体がおこるにはけっして十分ではない。もしそうでなければ、古代のローマ、ビザンチン等は、自由な労働と資本とをもってその歴史をおえたか、でなければむしろ新しい歴史をはじめていたことであろう。」（『資本制に先行する諸形態』）

ランド銀行について概観されている。

「資本主義的生産様式のその他の諸条件が現存する時と所」に触れられているのは、第20章である。

6) 資本主義的生産様式の基盤と「現実的に革命的な道」

しかし、この問題は、本稿の課題とは直接関係ないので、マルクスの所説を簡単にみておくにとどめたい。

『資本論』第3巻第20章において、マルクスは、『資本論』第1巻における原蓄章の有名な箇所と相呼応するかたちで、16世紀および17世紀には、地理上の諸発見にともなって商業に生じた、世界市場の突然の拡張、流通する諸商品の何倍もの増加、アジアの諸生産物とアメリカの諸財宝とを支配しようとするヨーロッパ諸国民のあいだの競争、植民地制度といった、商人資本の発展を急速に高めた大きな諸革命が、生産の封建的諸制限を粉碎することに本質的に貢献したとしている [S.344]。だが、マルクスは、後続する文章において、「とはいえ」、として次のように続けている。

「[S.344] とはいえ、近代的生産様式は、その第一期であるマニュファクチュア時代には、そのための諸条件が中世内部で生み出されていたところでだけ発展した。」(『資本論』第3巻第20章)

すなわち、「商業の突然の拡張と新しい世界市場の創出」とが、「封建的生産様式の資本主義的生産様式への移行を促進する主要な一契機」をなしたとしても、「このことは逆に、すでに創出された資本主義的生産様式の基盤の上で生じた」[S.344] というのである。

ここでいわれている「中世内部で生み出されていた」「すでに創出された資本主義的生産様式の基盤」が何を指しているのかは、第20章においては具体的な説明がなく、解釈の分かれるところであろう。

そのような曖昧さを残したまま、マルクスは、資本主義的生産様式への

「封建的生産様式からの移行」について、よく知られているとおり、二重の仕方 [S.347] と三通りの移行 [S.348] について、これもまた未整理な状態で提示している。ここでは後者に統合して要約しておくのと次のとおりである。

①商人が直接に産業家になる。商人たちによって原料および労働者もろとも外国から輸入される奢侈品工業、たとえば15世紀にコンスタンティノープルからイタリアに輸入されたような奢侈品工業の場合。

②商人が生産を直接に支配し、古い生産様式を変革するのではなく、直接生産者を名目的には自立させておき、小親方たちを自分の中継商人たちにしたり、直接に独立生産者から買いつけたりすることで、むしろ古い生産様式を保存する道。たとえば、17世紀のイギリスの織物商人 [織元] が自立している織布業者たちを自己の支配下において羊毛を売り、織物を買収する場合。

③産業家が商人になって、直接に商業のために大規模に生産する現実的に革命的な道。農業的自然経済に対立し、また中世的都市工業の、同職組合に結合された手工業に対立する場合。

このように、第20章においては、封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行にとって、農業的自然経済と中世都市の同職組合的な手工業に対立しつつ、産業家が商人になって直接に商業のために大規模に生産する道筋が、「現実的に革命的な道」だとされている¹⁰⁾。

7) 小括

以上みてきたように、マルクスの叙述自体は錯綜したまま残されたもの

10) 封建制から資本制への移行にかんする「二重の仕方」、「三通りの移行」をめぐるは、移行論争においてさまざまな解釈論が行われてきた。最近のものとしては、隅田聡一郎 [2016年]、参照。他方、『資本論』の解釈論そのものではなく、宇野弘蔵の三段階論やウォーラステインの世界システム論などを準拠棒としつつ、それらへの批判的検討をつうじて、資本主義的市民社会の発生過程の諸問題を論じたものとして、新田 [1998年] 第6章、新田 [2016年]、新田 [2020年]、等を参照されたい。

であったが、それを整理していくと、彼の脳裏に描かれていたであろう商品交換の共同体への反作用による分解作用というのは、多段階的な機序からなるものであった。

まず、原始的共同体から、生産力の発展、人口の増大によってアジア的共同体＝「農業共同体」に至って共有地と家族ごとの菜園の占有という形態が生まれる。そこに、動産所有の契機が生まれる。ここまでの共同体は頑強で不変的である。

しかし、戦争、征服などをつうじて変容したローマの形態、ゲルマン的形態においては、共有地の私有化が進むようになる。さらに、戦争ための軍務負担のもとで高利貸資本によって平民が債務奴隷、農奴へと転落させられていくことによって、共同体所有は分解し私的所有へと転化してしまうというものであった。

他方で、マルクスは、共同体間の商品交換の共同体内部への反作用による分解作用について繰り返し述べていたが、その具体的な機序についての説明は結局のところ、どこにもなされてはいなかった。これは、流通費用は空費であり、商人資本・商業資本は詐欺瞞着であり、商品交換は共同体にとって外来的で分解作用をもっているといった、一連のマルクスの一面的で偏った認識は成り立ちがたいということを示唆していよう（この点については、新田〔2020年〕146-147頁、参照）。このことはまた、高利貸資本こそが問題の核心なのだということを意味しているといえよう。

実際のところ、商人が共同体に対して分解的に作用するように見えるのは、商業活動が停滞し過剰化した商人財産、貨幣財産が遊休貨幣資本として直接、間接に土地集積に向かうことによってである。つまり、商人の保有する資本が共同体に分解作用をもたらすのは、過剰化した遊休貨幣資本の部分である。投資機会のない過剰遊休貨幣資本が増殖を求めることによって、それは結局、不動産の集積へと向かうことになる。このことが、直接的生産者からの土地収奪をもたらし、共同体の分解をもたらすのである。

したがって、共同体分解作用にとって理論的に重要な意味をもつのは、

商人資本・商業資本による商業活動そのものではなく、商人資本家の貨幣財産としてある遊休貨幣資本のうち、それ以上、商業に投資のはけ口がなくなり過剰化した部分である。これが一方では直接的な土地集積に向かい、他方では貴族、領主と小生産者の双方への高利貸に向かうことによって、間接的に土地集積に向かう。

このようにして、高利貸として投下された貨幣資本は、いずれは担保として土地を集積することとなり、小生産者を債務奴隷（古典古代）、農奴（中世）、賃労働者（近代）へと転化することとなったのである。

むすびにかえて

マルクスは、『資本論』第3巻第36章において、近代的な「[S.613] 信用制度の発展は、高利にたいする反作用としてなしとげられる」として、「[S.617] 一方では、死蔵されているあらゆる貨幣準備を集中し、これを貨幣市場に投じることによって、高利貸資本からその独占を奪い、他方では、信用貨幣の創造によって貴金属そのものの独占を制限する」とし、近代的な信用制度のもとで高利貸資本は、「[S.613] 資本主義的生産様式の諸条件および諸要求に従属する」（『資本論』第3巻第36章）としていた。

しかしながら、いうまでもなく、19世紀末から20世紀初頭におけるいわゆるドイツ型の「金融資本」においては、銀行資本に集積された貨幣資本が株式資本をつうじて産業資本を支配系列下におくものとなった。

また、1970年代以降の不換通貨制＝管理通貨制＝変動相場制のもとで際限なく膨張していく現代の金融拡大は、かつての高利貸資本そのままに、金融資産の存立基盤そのものをみずから破壊、分解しかねないものへと転化している。

その意味で、「資本主義以前（先ブルジョア的なもの）」としての高利貸資本と対称をなす、いわば近代的信用制度にとっての「以後的なもの」としての現代の不換通貨制＝管理通貨制＝変動相場制のもとの金融拡大と

それによる経済構造と政治的組織の破壊、分解作用の分析が、重要性を増しているといえよう。

〈参考文献〉

- 宇野弘蔵 [1971年]『経済政策論 改訂版』弘文堂
- 大塚久雄 [1955年]『共同体の基礎理論』（再刊，岩波現代文庫，2000年）
- 隅田聡一郎 [2016年]『『資本論』第3部草稿における「歴史的考察」の再検討——新旧「移行論争」を題材にして』、『季刊経済理論』桜井書店，第53巻第3号
- 新田滋 [1998年]『段階論の研究 マルクス・宇野経済学と〈現在〉』御茶の水書房
- 新田滋 [2016年]「〈広義の段階論〉序説——『資本主義』の超長期的循環と『資本主義社会』の生成・発展——」、『グローバル資本主義と段階論』[マルクス経済学の現代的課題・第Ⅱ集 現代資本主義の変容と資本主義 第2巻]，御茶の水書房
- 新田滋 [2020年]「資本主義・資本主義的生産・資本主義社会の区別について」，専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第54号
- 新田滋 [2022年]「マルクスの唯物史観と歴史科学の可能性」，専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第56号（近刊予定）
- 渡辺憲正 [2005年]『『経済学批判要綱』の共同体／共同社会論』，関東学院大学『経済系』第223集
- Marx, Karl/Engels, Friedrich [1845-46], Die Deutsche Ideologie. マルクス，エンゲルスの共著である本書（第1章）には周知のように，下記のように多数の草稿編集案と邦訳があり，引用頁数に関しては，各版における草稿の配列順序や草稿頁数の表記法にバラツキがあるため，廣松渉版，現代文化研究所版，岩波文庫（廣松渉編訳／小林昌人補訳）版に共通する草稿の用紙番号（いわゆるボーゲン番号）の表記法に拠るとともに，全集版・国民文庫版に共通するMEW頁数も併記することとする。リヤザノフ版（1926年）による三木清訳『ドイッチェ・イデオロギー』岩波文庫，1930年。アドラツキー版（1932年）による古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫，1956年，真下真一訳『マルクス＝エンゲルス全集』第3巻，1963年，および同訳の国民文庫版，1965年。バガトゥーリア版（1965年）による花崎皋平訳『新版 ドイツ・イデオロギー』合同新書，1966年。廣松渉編訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー第1巻第1篇』河出書房新社。服部文男監訳

『[新訳] ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、およびその研究版である
 渋谷正編訳『草稿完全復元版ドイツ・イデオロギー [序文・第1巻第1章]』
 新日本出版社。廣松版の編集案を若干改変した新訳刊行委員会『新訳ドイ
 ツ・イデオロギー〈マルクス主義原典ライブラリー〉』現代文化研究所、
 2000年。廣松渉編訳／小林昌人補訳『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』、
 岩波文庫、2002年。なお、引用に際しては特定の邦訳にのみ依拠せず、ま
 た既存の邦訳によっていない場合もある。

Marx, Karl, [1857-58], Formen, die der kapitalistischen Produktion
 vorhergehen, in Marx, Karl [1857-58], Grundrisse der Kritik der
 politischen Ökonomie, Dietz Verlag, Berlin, 1953. マルクス『経済学批判要
 綱 III』高木幸二郎監訳, 大月書店, 1961年, 邦訳407-450頁に所収の「経
 済的社會構成体の前進的な諸時代」, 手島正毅訳。およびその部分的改訳を
 収録した国民文庫版『資本制生産に先行する諸形態』, 1963年。Marx, K.
 Ökonomische Manuskripte 1857/58. Teil 2, MEGA, Abteilung: “Das
 Kapital” und Vorarbeiten, Band 1. Dietz Verlag, Berlin, 1981. 『資本論草
 稿集② 1857-1858年の経済学草稿 第二分冊』大月書店, 資本論草稿翻訳委
 員会訳, 1993年, S. 378-415, 所収の「資本主義的生産に先行する諸形態」,
 増谷英樹・浅見克彦訳

Marx, Karl [1867/73/85/94], Das Kapital, I—III, MEW, Band 23-25, Diez
 Verlag, Berlin, 1962. マルクス『資本論』第1～3巻。『資本論』からの引
 用は, 引用文中にMEW, Band 23-25の頁数を [S.54] のように記す。引用
 に際しては, 特定の邦訳にのみ依拠せず, また, 既存の邦訳によっていな
 い場合もある。

Marx, Karl [1881], Brief von Karl Marx an Vera Sassulitsch. マルクス「ヴェラ・
 ザスーリッチへの手紙」, 手島正毅訳, 国民文庫版。「ヴェ・イ・ザスーリ
 チの手紙への回答の下書き」, 平田清明訳, 『マルクス=エンゲルス全集』
 第19巻。引用は主に手島訳による。

The Decomposition Mechanism of Communities Caused by Usury Capital

Shigeru NITTA

《Abstract》

In this paper, we first reorganize the narratives of Marx's intricate articles, "German Ideology," "Pre-Capitalist Economic Formations," "Capital" Vol.1 and Vol.3, and "Drafts of Marx's Letter To Vera Zasulich," restore the idea of his decomposition mechanism of the community, and attempt to evaluate it. First, Marx's most detailed study was the transition from a primitive community to an Asian or "agricultural community" due to the development of productivity and population growth. Both communities were considered to be robust enough not to be easily decomposed. Second, Marx investigated the process of transition to Roman and Germanic communities that were easily decomposed. Third, he illustrated that the general turning point for the Roman and Germanic communities was that they were decomposed by the gradual concentration of land ownership into usury capital as a result of the military burden of the war. Nowhere did Marx succeed in explaining the decomposing mechanism of the community caused by the reaction of commodity exchange into the community. This shows that Marx's false prejudice, which regards merchant capital and commercial capital as frauds and scams that destroy communities, was denied by Marx' investigation itself. This signifies that the problem is usury capital itself.

